

ラベンダー

島町 表 惠美子

庭石を覆ふ榊の幾本を伐りて悲鳴か樹液の滲む

わが庭を狭しと広がるラベンダー 双手を広げ風抱くごとし

ラベンダーの花幾千の放つ香に深く息吸ふ指の先まで

夕暮にすつと暑さの引くごとし 蝸二声佇みて聞く

釣り人の色とりどりに並むテント映す池の面虹立つごとし

更に奨励賞の二篇目として表惠美子作品「ラベンダー」を推す。

伐り倒した榊の樹液を「悲鳴」と感受した繊細さ。一般的には涙とするのが定番だが、そうしなかったことがこの作品を非凡にした。庭いっぱいラベンダーが風を抱くと捉え、その香りを指の先まで吸うと表現した感覚がいかにも若々しい。四首目の蝸の声を身に引きつけて詠んでおり、これも上手い。五首目は現代の釣堀の光景であろうか。その奇抜な商才を肯定も否定もせず、「虹立つごとし」と美しさとして直感している。ここにも純な個性が覗える。